

# 練習問題

**1 〈助詞の種類〉** 次の——線の助詞の種類をあとから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ・友達から手紙が届いたぞ。
- ・暇だから、ゲームをして遊ぼう。
- ・弟も知っているが、兄は知らないのかしら。

ア 格助詞    イ 接続助詞    ウ 副助詞    エ 終助詞

① ( )    ② ( )    ③ ( )    ④ ( )    ⑤ ( )  
 ⑥ ( )    ⑦ ( )    ⑧ ( )    ⑨ ( )    ⑩ ( )

**2 〈接続助詞〉** 次の——線の接続助詞は、前後をどんな関係でつないでいますか。あとから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- 後ろの人に追い抜かれても、最後まで走り続けよう。
  - 町まで行くには、バスもあれば電車もある。
  - もっと練習をしないと、試合には勝てない。
  - 暗いので、部屋の明かりをつけた。
  - 疲れているが、ぐち一つこぼさない。
- ア 確定の順接    イ 確定の逆接    ウ 仮定の順接  
 エ 仮定の逆接    オ 並立

**3 〈副助詞〉** 次の——線の副助詞の意味をあとから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- 今年こそ優勝するぞ。
- 男性だけで女性はいなかった。
- 涙が出るほどつらかった。
- そんなことは子供でも知っているよ。
- 試合は今終わったばかりだ。

ア 程度    イ 添加    ウ 動作の直後  
 エ 限定    オ 強調    カ 他を類推させる

**4 〈終助詞〉** 次の——線の終助詞の意味をあとから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- 彼の技術はすごいなあ。
  - 猫はなぜ体を丸くするのか。
  - 公園の木に登るな。
  - もちろん、だじょうぶだとも。
- ア 強調    イ 禁止    ウ 感動    エ 疑問

**5 〈助詞の意味・用法〉** 次の各組の——線の助詞と同じ意味・用法のものをあとから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- 雨の降る日はゆううつだ。  
ア 庭に咲く花の色が美しい。  
イ 野原で虫の鳴く声を聞いた。  
ウ やっと山の頂上にたどり着いた。  
エ 机の上にある本は友人のだ。
- 雲が隠れると、太陽が出てきた。  
ア 速く走らないと、電車に間に合わないぞ。  
イ お父さんによろしくと、先生がおっしゃった。  
ウ 祖母の病状について、母が医者と話した。  
エ 大声で呼びかけると、こだまが返ってきた。
- 両親は作物の取り入れに出かけた。  
ア 明日の十時に試合が始まる予定だ。  
イ デパートに買い物に行っていた姉が帰った。  
ウ 実験は失敗に終わった。  
エ 午後の時間を祭りの準備に費やした。

**6 〈助動詞の意味〉** 次の——線の助動詞の表す意味をあとから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- あそこを歩いているのは有名人らしい。
  - ぼくは漢字の勉強をします。
  - この景色をゆつくりながめたい。
  - それが事実ならば、大変なことだ。
  - 母は妹を買い物に行かせた。
  - 思いもよらぬ出来事が起こった。
  - 眠いので、十時には寝よう。
- ア 希望    イ 使役    ウ 丁寧    エ 意志  
 オ 推定    カ 否定(打ち消し)    キ 断定

**7 〈「れる・られる」〉** 次の——線の「れる・られる」の意味をあとから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- これくらいの分量なら簡単に覚えられる。
  - この写真を見ると、友人のことが思い出される。
  - 市長が明日私たちの学校を視察されるそうです。
  - おぼれている人が、海の救助員に助けられる。
- ア 受け身    イ 自発    ウ 可能    エ 尊敬

**8 〈助動詞の意味・用法〉** 次の各組の——線の語のうち、一つだけ意味・用法が異なるものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 彼はまったく本を読まない。  
イ この本はおもしろくない。  
ウ もう時間がない。  
エ 今日はあまり寒くない。
- ア ここから富士山は見えないそうだ。  
イ 一行は午後三時に到着するそうだ。

**9 〈助動詞の意味・用法〉** 次の各組の——線の助動詞と同じ意味・用法のものをあとから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- 春なのに夏のような暑さだ。  
ア 明日は雪が降るように思う。  
イ 東京のような大都会に住んでみたい。  
ウ 今日の給食はシチューのような気がする。  
エ 太陽のような明るさをもっている人。
- 山に沈みかけた太陽がまぶしい。  
ア 学校から帰ったばかりなのに用を言いつけられた。  
イ 今日釣ってきた魚を夕食に出した。  
ウ 赤い洋服を着た女の子と出会った。  
エ 花をきれいにいけたのはあなたでしたね。
- 友達に図書館に行こうと声をかけられた。  
ア この仕事を終えるのにまだ三時間はかかる。  
イ みんなで我々のクラスの勝利を願おう。  
ウ 来週には桜の花が咲くだろうと母が言った。  
エ 湖の夕暮れの景色を絵にかこうと思う。

# 総合テスト(2)

得点

/100点

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(1)~(14)は段落番号です。(小計48点)

- ① 自然や人間についてはわからないことがあることをミトメ、一方で人間同士はわかりあい、落ち着いた気持ちで暮らしていくための秘訣は「想像力」をもつことだと思えます。人間にとつてもっとも大事で、しかもいまいばん欠けているのが想像力ではないでしょうか。
- ② 機械は想像力を要求しませんが、生きものの向こうにはつねに想像力が必す要です。想像力の基本は、さまざまな事柄や生きものや人とのあいだの関係に思いをいたすことです。生きものはすべて関係のなかにある。孤立したものはないので、想像力が必要になるのです。

③ A、電車の椅子は人数が決まっています。ここは七人掛け、ここは五人用ということは、目分量でわかります。座るときには人数に合うように座りますし、近くの人が上手に座らないために、本来七人掛けのところに六人しかいないと落ち着きません。もうちょっと動いて、七人座れるようにすればいいのに、どうしてほかの人のことを考えられないだろうと気になります。

④ ここは七人で分けるものだという全体の把握ができ、自分がちよつと動けばあの人座れるだろうと思う。これが想像力です。相手の気持ちを考えたり、自分がここにいるということだけでなく、遠くから全体を見たときにここはどうなっているのだろうと考えられる力、それを想像力といっているのであり、ファンタジックなことを考えるという意味ではありません。

⑤ それがわかるということは、そこにいる人々のあいだに想像力ができるところです。直接話しあうわけではないし、一生のあいだも二度と会わない人である場合も少なくありません。けれどもそこにいるあいだは、お互いが一つの椅子を分けあっているという関係があるわけです。でたために座っているときは、シユウイの人々とは無関係になってしまいます。生きものの本質は、外との関

係があることであり、知り合いでなくても関係がつくれることが大事です。

⑥ おそらくもっとも想像力と遠いと思われるのが科学ではないかと思えますが、科学も基本は想像力です。科学は、いままでだれも調べなかったことを探り出して、それに答えを出す仕事であり、論文には、どんな小さなことでもいいから新しいことが求められます。新しいことを出すには、新しい問いが必要で、どんな問いを立てるかというところに個性が出ますし、そこから仮説を立てて考えていくところで、想像力が活躍します。

⑦ 研究の結果出た答えは、だれがやっても同じように得られるものでなければなりません。再現性といって、これは科学にとって B のことです。けれどもそこに到る発見までの過程は、それぞれの人の頭のなかであれこれ考えるのであり、各人の特徴が出ます。科学は人間や自然を知るための行為であり、自然のなかにあるさまざまな関係に思いをはせ、想像力を生かす生きものの感覚を必要とします。もちろん、原理や事実がわかり、それを応用した技術はすべてがわかつたうえでの明確なものでなければ困ります。新幹線が運転する人や動かす時間によって動き方が違うというのは怖くて乗れません。つくり上げるまでの過程とつくり上げたものとは別です。

⑧ これまでの社会は技術優先で、たとえば自動車の性能を上げることで便利さを追求してきました。自動車の数が少ないときはその便利さだけが見えていましたが、いまではそのマイナス面も明らかになってきました。交通渋滞、事故、排気ガスによる汚染や健康ショウガイなどです。もちろんこれには多くの対策がなされ、排気ガス規制もかなりキビしくなりました。すでにハイブリッド車は走っていますし、燃料電池も可能性が高いようです。安全性や交通渋滞解消に対しても、コンピュータを利用した交通システムなどの技術が開発されています。

⑨ しかし、事を技術だけで解決しようとせず、社会としての自動車の使い方

を必要とします。自分と自動車の関係だけでなく街を走る自動車の様子、さらには世界中の人々と自動車の関係を思い描くと、世界中を自動車が走りまわる状態がよいかどうか。もっと公共の交通を便利にすることを考える必要があるのではないか。街づくりをするときにどんな道路を設計するのがよいかなど、既存の事柄に束縛されない新しい発想が出るはずで

⑩ 自動車も飛行機も、それまでなかったものに夢をかけた人々が開発しました。いまや、環境を考えた新しいシステムに夢をかけた技術開発が求められます。ここでまた豊かな想像力をはたらかせる必要があります。技術者にも想像力は大事です。

⑪ 新しい技術開発だけでなく日常でも安心のある生活をしていくために、一人ひとりが危険にどう対処するかを考える必要があります。東京の都心にある大きなお宮が池の水を抜いたと聞きました。近所の方たちに子どもが落ちるとあぶないといわれるので、由緒ある池の水を抜いたのだそうです。子どもが落ちたら困るといふ気持ちはわかりますが、一方で、危険について考えることも大切です。危険に関して身近な例でいえば、食べもの、自然界には毒物がたくさんあります。フグにもキノコにも。

⑫ 本来生物は、外の状態をつねに感知しながら生きるようにさまざまな感覚をもっています。動物には視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚という五つの感覚が備わっています。これらの感覚を上手に使ってつねに外界に気を配るように私たちの体はつくられているのです。

⑬ 最近の私たちの生活は、この感覚を鈍らせる方向に動いているようです。能力は使わなければ磨かれませんが、できるだけ自然に触れ、生きものとしての感覚を生かして暮らすと生活が豊かになります。自然は美しい花を咲かせ、鳥の声も楽しいけれど、一面怖いものです。自然や生命には危険がともなうという気持ちでいい限り、本当の対処はできません。

⑭ 生命を基本として社会を考えるとすることは、命は大切と大声でいつてなにかを人に要求することではありません。わからないことがたくさんあることを認めながら、見えないところにまで想像力をはたらかせ、一人ひとりが自分

のもっている感覚をフルに活用し、よく考えて生きるといふことです。硬いえば、自立性のある個人、責任をもって生きる個人ということになります。平たくいうなら持っている力をできるだけ生かして、前向きにいっき暮らす人になるということです。(中村桂子「生きもの」感覚で生きる)

\* ファンタジック=ファンタスティック。空想的。

問一 線⑦~⑨のかたかなを漢字で書きなさい。(2点×4)

⑦ め  
⑧ ①  
⑨ しく

問二 線①「想像力」とありますが、その基本はどういうことですか。それが述べられている一文を文中から探し、その初めの五字を書き抜きなさい。(4点)

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

問三 A にはあてはまる言葉として最も適切なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。(3点)

- ア ところが
- イ あるいは
- ウ たとえば
- エ したがって

問四 線②「座るときには人数に合うように座ります」とありますが、このことができるためにはどんなことが必要なのですか。最も適切なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。(4点)

- ア 遠くから全体を見ることと、自分の気持ちを考えること
- イ いっしょに座る人たちと話し合っつてよい関係を結ぶこと
- ウ 全体を把握することと、他人の気持ちを考えること

エ 一生のあいだもう二度と会わない人とも関係をもつこと

問五 線③「そこ」とありますが、この場合はどこのことですか。(3点)

問六 線④「科学も基本は想像力です」とありますが、このように言えるのはなぜですか。その理由として最も適切なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。(4点)

- ア 科学の研究の結果出た答えは、だれがやっても同じように得られるものでなければならぬところに想像力が活躍するから。
- イ 科学には新しい問いが必要で、そこから仮説を立てて考えていく際に想像力が必要になるから。
- ウ いままでだれも調べなかったことを探り出すという作業は、想像力なしには成り立たないから。
- エ 科学の本質は、外との関係をどうつくるかということであり、そこには想像力が欠かせないから。

問七 Bにあてはまる言葉として最も適切なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。(3点)

- ア 不本意
- イ 不必要
- ウ 不可欠
- エ 不相応

問八 線⑤「特徴」とありますが、これと同じような意味で用いられている言葉を⑤・⑥段落の文中から二字で書き抜きなさい。(3点)

--	--

2 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。(小計18点)

宋朝夫婦餅をうりて生業とする者、あるとき、道の傍らに銀の軟挺六つ袋に

入れて落としかけるを見付けけるに、もとより正直なる者どもにて、何とぞ返さ

ばやと普く触れけるに、その主といふ者来たりければ、これを渡しけるに、「三

つをば御辺に奉らん。」といひけるが、惜しくや成りけん、「この銀七つありし

に、六つあるこそ不審に候へ。」と、怪しみけるを、「一つとり候ふ心に候へば、

何しにかくは返し申すべき。」といへども、兎角して論果せず、所の太守へ訴へ

ける。太守見付けたる者をば正直と見ながら、別の処に妻を召し、事の仔細を

問はるるに、夫の詞に違はず。よつて奉行、「見付けたる者それを引き込めずし

て元の主に返さんとするは正直なり。今主といふ者七つあるを落としたるなれ

ばこの軟挺には非ざりけり。これをば夫婦の者にたぶべし。かの主は七つあら

んを求めて取るべし。」とぞ判かれける。(「梅園叢書」)

問一 線①「もとより」の意味として最も適切なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。(2点)

- ア もともと
- イ つねに
- ウ 最も
- エ 昔は

問二 線a～dのうち、「奉行」の動作であるものを一つ選び、記号で答えなさい。(2点)

--	--

問九 線⑥「いまではそのマイナス面も明らかになってきました」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

- (1) 「マイナス面」を解決するために、どんな技術が開発されているのですか。文中に挙げられている技術、または技術の産物をすべて書き抜きなさい。(3点)
- (2) 筆者は、「マイナス面」の解決には、技術だけでなく何が必要だと考えていますか。文中から二十字以内で書き抜きなさい。(3点)


問十 線⑦「この感覚を鈍らせる方向に動いているようです」とありますが、このことによってどういう事態が生じると筆者は考えていますか。最も適切なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。(5点)

- ア 特定の感覚だけを使って外界に気を配るようになる。
- イ 自然や生命には危険がともなうということを忘れてしまう。
- ウ 一人ひとりが危険にどう対処するかを必要以上に考えるようになる。
- エ 自然や生命の美しさに対して目を向けなくなってしまう。

問十一 筆者は、読者にどういう人になってほしいと考えているのですか。適切でないものを次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。(5点)

- ア 持てる力をできるだけ生かして、前向きにいきいき暮らす人
- イ 想像力をはたらかせて感覚を活用し、よく考えて生きる人
- ウ 外の状態を感じしなくても生きられるような能力を備えた人
- エ 自立性があり、個人として責任をもって生きる人

問三 線②「いひける」を現代かなづかいに直して書きなさい。(2点)

--	--

問四 線③「惜しくや成りけん」とありますが、「主といふ者」はどうすることが惜しくなったのだと考えられますか。二十字以内の現代語で書きなさい。(4点)

--	--

問五 次の文章は、奉行の判断をまとめたものです。A・Bにあてはまる言葉を、Aは十五字以内、Bは二十字以内で、それぞれ現代語で書きなさい。(4点×2)

銀の貨幣が六つ入った袋を拾ったと言う「夫婦」、銀の貨幣が七つ入った袋を落としたと言う「主といふ者」の言い分を踏まえると、銀の貨幣が六つ入った袋は、A。したがって、拾った「夫婦」に銀の貨幣が六つ入った袋を与えるべきであり、「主といふ者」はBべきである。

--	--

3 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(小計34点)

妻の心配は小学一年生になったばかりの娘の葉についてであった。「なんだか随分ながい時間をかけて学校へ行っているようなのよね……」と、妻は声をひそめるように言った。

私と妻は共働きであったから、娘が小学校に行くようになるとみんなほぼ同じ時間に家を出ることになる。家から小学校までは大人の足で七、八分、小学生の足でもゆつくり十五分もあれば充分いける距離であった。

「それがどうも三十分ぐらいかかっているらしいのよ。先生からの連絡だといつも授業ギリギリの時間に着くらしいのね。だからもっと早く家から出すようにして下さい、というんだけど、実際のところは家をきっちり三十分前に出ているんですからね……」

私はなんだかそれはやっぱ随分困ったことだなあ、と思いつつ妻のそういう話を聞いていた。だからといってどうしたらいいのか新米の父親にはよくわからなかったのだ。

三十分よりもっと前に、あとさらに十五分余裕をみて家から出す、などということをしてみても問題の本質的な解決の方法にはならないだろう、というのは私にもわかっていった。

「わたし、例の葉の登校時間のこと、今週の遅番の時にひとつ隠密作戦をやるうかと思って……」

それから数日して妻はいきなりそんなことを言った。

「隠密作戦？」

「まあまかしといて」

妻はそう言ってなんだかすこし忍者のような顔をして笑った。

妻の隠密作戦とは、学校へむかう葉のあとをすつと見え隠れに追跡尾行していく、というおそろしく単純明快な作戦であった。

そしてその結果、どうにも少々笑って考え込んでしまうような「事実」がわかったのである。「あれはなんていうのかしらねえ。道草、というのともちがうような気もする

けれど。でも実際には道ばたに生えている草の前にしゃがんで、その草の葉を上からとか下からとか、とにかくまあじっくりしみじみ眺めて、それから指ではじめてみたりしているから、ああいうのが本道の道草というのかもしれないわねえ……」

妻はまた半分笑いながらそんなふうに言っていたが、話の内容はそんなに静かにしみじみ笑っていられるものでもないのだった。

妻が尾行してわかったことは、とにかく学校へ行く道を歩きながら、娘の葉はあっちこちの風景に果てしない人生の興味を示し、そのひとつひとつをじっくり落ちついて追究してしまうものだから、なかなか道がはかどらないのだという。

「指で何をはじめていたのかなあ、と思ってそこへ行つてよく見るとどの葉にも朝露がいつぱいたまっているのがわかったの。あの娘はその露をしゃがんでいろんな角度から眺めて、そうして指でそおつとはじめてみたりしていたのね……」

「そうか理科の勉強をしたんだ……」

私はどうも意味もなく自分の頭を掻いてそんなふざけたことを言ったりした。

「それを言うなら詩の勉強もやっていたわよ。別の場所では空を見あげてじつと雲を眺めていたりしたからね、でもそのあとは道ばたのドブ川の水をだいたいぶながいこと見つめていたけれど……」

妻の尾行によって、葉はそんなふうにしてあっちでひと眺め、こっちでひと眺めして、たっぷり三十分かけて学校へ行っている、ということがわかった。

だからといってそれを無理にやめさせるのはどうも……、というのが、その時私たちが話して決めたなんとはなしの結論であった。

(椎名誠「はるさきのへび」より「娘と私」)

問一 線⑦～⑩の漢字の読みを書きなさい。(2点×4)

⑦ \_\_\_\_\_ ⑧ \_\_\_\_\_ ⑨ \_\_\_\_\_ ⑩ \_\_\_\_\_

問二 線①「学校へ行っている」とありますが、「葉」はどのように学校へ行っているのですか。次の□A・Bにあてはまる言葉を、Aは七字、Bは六字で、それぞれ文中から書き抜きなさい。(完答4点)

□A \_\_\_\_\_ □B \_\_\_\_\_

問三 線②「らしい」とありますが、これと異なる働きの「らしい」を次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。(2点)

- ア 明日は晴れるらしい。
イ もっと学生らしい生活をしなさい。
ウ 暗くて見えないが、どうやら犬がいるらしい。
エ 駅までの道はかなり遠いらしい。

問四 線③「問題の本質的な解決の方法にはならないだろう」とありますが、「私」がどのように考えたのは、なぜですか。それを説明した次の文の□A・Bにあてはまる言葉を、Aは五字、Bは九字で、文中からそれぞれ書き抜きなさい。(完答4点)

□A \_\_\_\_\_ □B \_\_\_\_\_

問五 線④「指ではじめてみたりしている」とありますが、「葉」は何をほじっていたのですか。文中の言葉を使って、十五字以上二十五字以内で書きなさい。(4点)

\_\_\_\_\_

問六 線⑤「なかなか道がはかどらないのだ」とありますが、この部分を「学校」という言葉を使って二十字以内で書き直しなさい。(4点)

\_\_\_\_\_

問七 線⑥「あっちでひと眺め、こっちでひと眺め」とありますが、「葉」のこの行為を別の部分ではどのように表現していますか。文中から四十五字以上五十字以内で探し、その初めと終わりの五字を書き抜きなさい。(完答4点)

\_\_\_\_\_

問八 線⑦「なんとはなしの結論であった」とありますが、「私」の結論として最も適切なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 「葉」をこのまま温かく見守っていききたい。(4点)
イ 「葉」を学校のペースについていかせたい。
ウ 「葉」の勉強ぎらいをどうにかして直したい。
エ 「葉」の学校生活への不満を少しずつ解消させたい。

練習問題

- 1 ① ア ② ア ③ エ ④ イ ⑤ ア ⑥ イ ⑦ ウ ⑧ イ
- ⑨ ウ ⑩ エ

解説

格助詞は主に体言に、接続助詞は主に活用語に付く。終助詞は文や文節の終わりに付く。副助詞はいろいろな語に付くので、まず格助詞・接続助詞・終助詞を判断し、残ったものが副助詞かどうかを見きわめればよい。①の「から」は起点を示す格助詞、④の「から」は確定の順接の接続助詞、②の「が」は主語を示す格助詞、⑧の「が」は確定の逆接の接続助詞である。⑨の「は」を格助詞と間違えないようにする。

2

解説

- (1) 「後ろの人に追い抜かれる」のは仮定のこと、追い抜かれても最後まで走り続けるのだから、前後は逆接。
- (2) バスと電車を並べている。「電車もあればバスもある」のように、並立の関係にある部分を入れ換えることができる。
- (3) 「もっと練習をする」のは仮定のこと、練習をしないと試合に勝てないのだから、順接の関係。
- (4) 「暗い」は確定のこと、暗いので明かりをつけるというのは順接の関係。
- (5) 「疲れている」のは確定のこと、疲れているのになんか一つこぼさないのだから、逆接の関係。

3

解説

- (1) オ (2) エ (3) ア (4) カ (5) ウ
- (1) 「今年」を強調している。
- (2) いたのは「男性」のみだと限定している。
- (3) つらさの程度を「涙が出る」くらいだと言っている。
- (4) 子供を例に挙げて、他の人も知っていることを類推させている。
- (5) 試合が終わった直後であることを表している。

4

解説

- (1) ウ (2) エ (3) イ (4) ア
- (1) 終助詞によって、発言者のどんな気持ちや態度を表しているかを考えよう。
- (2) イ (3) エ

5

解説

- (1) 問題文とイの「の」は、「が」に置き換えられるので、主語を示す「の」である。アとウは、連体修飾語を示す「の」。エは「のもの」に置き換えられ、体言の代用の「の」。
- (2) 問題文とエは、確定の順接の接続助詞である。アは仮定の順接の接続助詞。イは引用

総合テスト(1)

- 1 問一 ⑦ 痛 ① 調達 ② 至難 ③ 処置
- 問二 ウ 問三 ア 問四 イ 問五 育児や介護の場面
- 問六 (その人のいのちは) そのいのちにさまざまなかたちであずかっている人のものでもあるから。
- 問七 ウ 問八 働いている人の姿 問九 エ 問十 ⑦
- 問十一 誕生も病も死もみな人の間で起こる出来事であるということ

解説

問二 ア・イ・エの「ない」「ぬ」に言い換えられるので、助動詞。ウの「ない」は、一つの文節になっているので、形容詞である。

問三 アは、②段落の内容と合っている。イは、①段落の「わたしにとっていちばん重要な事物もしくは対象だと言えるだろうか。これもまだ不正確だ」と合っていない。ウは、①段落の、「わたしのいのち」は「自分の持ち物、つまりは自分の所有物」ではないという筆者の考えと合わない。エは、②段落の「わたしがコントロールしているわけではない」という筆者の考えと合わない。

問四 「いのち」が「なくてはならない」ということ、このことは確定(17行目)なので、人は「このいのちはわたしのものだとはっきり主張」してゆずらないのである。

問五 「いのち」は自分だけのものではないということ、このことは、育児や介護の場面一つとってもすぐに分かる(27～29行目)に着目して、ここから八字で書き抜く。

問六 死ぬことは「その人のいのちだけに起こる出来事ではなく、そのいのちになんかさまざまなかたちであずかっている人のものでもある」である。だから、「その人に死なれた人びとにとっても」その人の死は「重大な出来事なの」である。

問七 ⑤段落に着目して筆者の考えを読み取る。「他人との交換や交感という関係からはなれて、人の暮らしというものは成り立たない」とある。このことが、「(生)も(死)もその根っこからして社会的な出来事なのである」ということを示すのである。

問八 自分の代わりになって「社会の大きな機構」の中で「働いている人の姿がじかに見えない」ために、人びとは「自分一人で生きることができていると錯覚している」のである。

問九 「自尊心」とは、「自分の存在を、ないがしろにできない大切なものとして感じる(61～62行目)心である。どのようにして、それが可能になるのかを読み取る。

問十 抜き出した文の「親という他者から贈られたものであるように」と、⑦段落の終わりの「自尊心は、他者からの贈りものとしてこそある」とのつながりをとらえる。

問十一 ⑧段落に「これがいのちについて考えるときの基本であると思う」とある。「これ」の指す内容を抜き出す。

2

- 問一 ⑦ 密集 ① 光景 ② 宿 ③ 湯気
- 問二 イ 問三 小さな箱庭みたい 問四 ア 問五 ア 問六 エ
- 問七 博士が、どんなことがあっても泣かないという約束を守らなかったこと
- 問八 ウ 問九 博士は弾か

解説

問二 「サルは言葉を呑み込んだ」(10行目)の「言葉」は、「なんや……ここに出たわけじゃん」(9行目)を指す。今まで歩いてきた道よりも楽な道があったということであり、それは、今までの道を決めた者(ムルチ)への非難ともとれるのである。

問三 自分が住んでいる世界をたとえた言葉。たとえを表す「みたい」という言葉に着目する。

問四 このときのムルチの様子が、ムルチらしくないものであったことを読み取る。

問五 この「笑い声」は、「今、あの家々の……そんな感覚だった」(41～46行目)とあるように、温かな家庭の団らんを象徴するものであることから考える。

問六 最初の段落の「とにかく……安心なのだ」(4～6行目)から、博士は元々探検を続けることよりも、家に帰りたいという気持ちが強かったことがわかる。帰りたいのに帰れないという不安が、ムルチの唇の動きを思い出して、急速に高まり、涙がこぼれなくなったのである。「もやもやとした感覚」とは、ずっとおさえてきた泣きたい気持ちと考えられる。

問七 泣いている博士を見ての表情である。泣くことについて、博士とムルチたちとの間でどんなやりとりがあったのかは、前書きの部分からわかる。

問八 このあとの、靴を脱ぎ捨てた行動からも、このときの博士の心理状態が見て取れる。

問九 帰りたい、帰れるのだろうかという不安な思いが、冒頭から徐々に高まり、泣き出すことで頂点に達しているが、ムルチの言動によって帰らなければという思いに変化している。その思いを行動に表した76行目から後半。

を示す格助詞。ウは相手を示す格助詞。

(3) 問題文とエは、目的を示す格助詞。他もすべて格助詞で、アは時間、イは場所、ウは結果を示している。

P 173

6

解説

- (1) 「どうも有名ならしい」と「どうも」を入れることができ、また、「らしい」を「ようだ」に置き換えられるので、推定である。
- (4) 断定の助動詞「だ」の仮定形である。
- (5) 使役の助動詞「せる」の連用形である。
- (6) 「思いもよらない」と言い換えられる。

7

解説

- (1) 「覚えることができる」と言い換えられるので可能。
- (2) 「自然に思い出される」と「自然に」を入れることができるので自発。
- (3) 「ご視察になる」と尊敬表現に言い換えられるので尊敬。
- (4) 海の救助員に、助けるという行為をされているので受け身。

8

解説

- (1) アは「ない」を「ぬ」に置き換えられるので、否定(打ち消し)の助動詞の「ない」。
- 他は形容詞である。形容詞の「ない」の前には、イ「おもしろくはない」、エ「寒くはない」のように「は」を入れることができる。
- (2) ア・イ・ウは活用語の終止形に続いていて伝聞の意味。エは動詞の連用形に続いていて様態の意味。
- (3) イは「母校(名詞) +だ」で、「だ」は断定の助動詞。アは「穏やかだ」、ウは「元気だ」、エは「まじめだ」という形容詞の活用語尾。
- (4) ア・イ・ウのそれぞれの文には、「私は」を入れることができ、発言者の否定(打ち消し)の意志を表している。エは「よくなるでしょう」と言い換えられ、否定(打ち消し)の推量を表している。

9

解説

- (1) 問題文とエは、前に「まるで」を入れることができ、比喩の意味。アとウは推定、イは例示。
- (2) 問題文は「沈みかけている」、ウは「着ている」と言い換えられ、存続の意味。アは完了、イは過去、エは想起の意味。
- (3) 問題文とイは、誘っているので勧誘の意味。アとウは推量、エは意志の意味。

- 問一 ⑦ 認 ① 周囲 ② 障害 ③ 敵
- 問二 想像力の基 問三 ウ 問四 ウ 問五 電車の中 問六 イ
- 問七 ウ 問八 個性
- 問九 (1) ハイブリッド車・燃料電池・コンピュータを利用した交通システム
- (2) 既存の事柄に束縛されない新しい発想
- 問十 イ 問十一 ウ

解説

問一 ⑦「認」の音読みは「ニン」で、「認識」などの熟語がある。③「敵」の音読みは「ゲン」で、「敵重」などの熟語がある。

問二 ②段落に「想像力の基本は、さまざまな事柄や生きものや人とのあいだの関係に思いをいたすということです」とあることに着目。

問三 生き物には「想像力が必要になる」という具体例が、③段落で電車の例を用いて述べられている。したがって、例を挙げて説明すれば、という意味の「たとえば」が当てはまる。

問四 電車の中で要求される「想像力」の内容を考える。④段落の説明に合致するものを選ぶ。

問五 ③⑤段落で述べられているのは、電車内での例である。

問六 ⑥段落から読み取る。科学では、新しいことが求められる。「新しいことを出すには、新しい問いが必要になる。その問いを立てて、「そこから仮説を立てて考えていく」ところで、想像力が活躍」するのである。だから、科学には想像力が必要なのである。

問七 「再現性」は科学にとってどうなのかと考える。「だれがやっても同じように得られるものでなければならぬ」ということは、なくてはならない要素だといえる。したがって、なくてはならないという意味の「不可欠」が当てはまる。

問八 答えを発見するまでにはあれこれ考えることが必要だが、そのやり方に「各人の特徴が出る」ということが述べられている。⑥段落の「どんな問いを立てるか」というところに個性が出ます」に着目すれば、「特徴」と「個性」が同じような意味で用いられていると判断できる。

問九 (1) 44〜47行目の二文からとらえる。

(2) 自動車のマイナス面が明らかになってきたために「社会としての自動車の使い方考える」ことが必要になってきたのである。そのためには「既存の事柄に束縛されない新しい発想」が必要になってきているのである。

問十 「この感覚」とは、生物が生きるために「外の状態をつねに感知」する感覚のこと。この感覚が鈍ると、「自然や生命」の中にある危険に対しても鈍感になってしまうのである。

問十一 ④段落から筆者の考えを読み取る。筆者は「想像力をはたらかせ、一人ひとりが

問二 学校までは「小学生の足でもゆっくり十五分もあれば充分いける距離」(5〜6行目)のだが、「葉」は「どうも三十分ぐらいかかっているらしい」(7行目)のである。

問三 イのほかは、推定の意味の助動詞。イは、「〜にふさわしい」という意味の形容詞をつくる接尾語である。

問四 「問題」とは、「葉」が学校に「授業ギリギリの時間に着く」(8行目)ということ。「本質的な解決の方法にはならない」と「私」が考えたのは、今より十五分早く家から出しても「葉」は結局「授業ギリギリの時間に着く」だろうと考えたからである。

問五 「指でおおってはじめてみた」(40行目)に着目。「葉」は道に生えている草の葉をはじめていたのだが、実は葉をはじめていたのではなく、その葉にいつぱいたまっていた朝露をはじめていたのである。

問六 「道がはかどらない」とは、「ここでは学校にたどりつかないということ」。

問七 34〜36行目の、「妻が尾行してわかったことは……娘の葉はあっちこちの風景に果てしない人生の興味を示し、そのひとつひとつをじっくり落ちついて追究してしまうものだから、なかなか道がはかどらないのだ」に着目してとらえる。

問八 妻と「私」は「葉」がたっぷり三十分かけて学校に行っていることに対して困ったことだとは思っているが、「それを無理にやめさせるのはどうも……」と考えている。妻と「私」は「葉」に道草をやめさせるのではなく、このまま温かく見守りたいと考えていたのである。

- 問一 ア 問二 d 問三 いいける 問四 三つの銀の貨幣を夫婦に与えること
- 問五 A 「主といふ者」のものではない
- B 銀の貨幣が七つ入った袋を探して手に入れる

解説

問一 「もとより」は、漢字で書くと「元より」。「以前から。初めから」という意味である。問二 「所の」太守」と「奉行」が同じ人間であることに注意する。

問三 語頭以外のハ行音をワ行音に直せばよい。

問四 自分の袋だと言って現れた者は、このあと、「この銀七つ……不審に候へ」と夫婦に文句をつけている。それは、拾ってくれた夫婦に三つの銀貨を差し上げようと言ったものの、銀貨をやるのが惜しくなったからである。

問五 奉行は、正直者の夫婦の言葉だから、袋に六つの貨幣が入っていたことは間違いのないことで、「主といふ者七つあるを……この軟挺に非ざりけり」と判断した。したがって、持ち主だという者は「七つあらんを求めて取るべし」と裁いたのである。

現代語訳

宋の国に夫婦で餅を売ることが職業としていた者が、あるとき、道のわきに銀の貨幣が六つ入った袋を落としていたのを見つけたとき、もともと正直者で、何とか返したいと広く知らせたところ、その袋の持ち主が来たので、これを渡したところ、(持ち主が)「三つをあなたに差し上げよう。」と言ったが、惜しくなったのだろうか、「この袋に」銀の貨幣が七つあったのに、六つあるのは不審なことと「怪しんだのを、一つ盗む気持ちでございまして、なぜこのようにお返しするだろうか、いやするはずがない。」と言っても(納得せず)、いろいろ言って話し合いつかず、その土地の長官へ訴えた。長官は(袋を)見つけた者を正直だと見て、別の所にその妻を呼び、このこととくわしい事情を問うたところ、夫の言葉と違っていない。よって奉行は「見つけたものがそれを自分の物としようとせず、元の持ち主に返そうとするのは正直なことである。これ(銀の貨幣が六つ入った袋)を夫婦に与えるべきだ。袋の持ち主だという者は銀の貨幣が七つ入った袋を探して手に入れるべきだ」と裁いた。

- 問一 ⑦ じゅうぶん ① れんらく ② よゆう ③ かく
- 問二 A 十五分もあれば B 三十分ぐらい 問三 イ
- 問四 A もっと早く B 授業ギリギリの時間
- 問五 道はたに生えている葉にいつぱいたまっている朝露
- 問六 なかなか学校への距離が縮まらないのだ 問七 あっちこっくしてしまっ
- 問八 ア

解説